

今回は2018年6月16日にパリ日本文化会館で実施した篠田伸二監督の「あしながおじさん」というドキュメンタリー映画の上映会と6月20日の夕方にノルマンディーの森の中で開催された映画祭について報告します。

「あしながおじさん」上映会

「あしながおじさん」はあしなが育英会（会長玉井義臣氏、副会長藤村修氏）がサブサハラ・アフリカの孤児たちの教育支援を開始したことを広く世界中に知ってもらうために製作したドキュメンタリー映画である。同会は過去50年以上、親を亡くした10万人以上の子どもたちを支援してきた日本のNGO。近年は日本の遺児だけでなく、アフリカの遺児支援も行ってきた。この映画は、同会が進める「アフリカ遺児高等教育支援100年構想」¹への支援を広げるために作られた。

1



「あしながおじさん」上映前に挨拶する筆者



上映後会場からの質問に答える篠田伸二監督と藤村修副会長

ストーリーは1912年に米国で誕生した小説「あしながおじさん」から着想を得たもので、ウガンダのエイズ遺児、東北の津波遺児、同小説のモデルとなったアメリカのヴァッサー大学コーラス部員ら3カ国から集まった素人の主役たちが、ミュージカル「レ・ミゼラブル」を創った舞台演出家ジョン・ケアードの指導のもと、それぞれの困難を克服しながらニューヨークのブロードウェイでコンサートを開き、最後は拍手喝采を受ける感動の幕切れとなるというもの。登場人物たちがドラマティックに成長していく4年間の成長が描かれている。

会場の当館小ホールには木寺駐仏大使ご夫妻、山田ユネスコ代表部大使ご夫妻、ガーナ大使、シュヴェツェール当館運営審議会共同議長をはじめ、翌週に欧州アフリカ映画祭を主宰する関係者や一般の来場者が100人ほど集まり、涙を流さない人がいなかったほどに感動が広がった。この映画は欧州アフリカ映画祭でも取り上げられ、20日午前中に駐仏ブルキナファソ大使館ホールでも若者たちを対象とした特別上映会が行われた。本作品は無償で上映できることから、参加者の関心も高く、パリの他の場所や、セネガル、マリ、モンリオールなどの映画祭からも上映の打診があったほどである。

筆者としては、日仏、日欧だけでなくアフリカやアジアとの文化交流も、当館活動の柱の一つに掲げており、今回の上映会の実施はその意味でも嬉しい反響であった。

¹ サブサハラ49ヶ国の各国から毎年一人ずつ優秀な遺児を世界の大学に留学させ、次代のリーダーを育成し母国の建設に参加させようという構想。

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。

「森の中の映画祭」

もう一つの興味深い映画上映会はノルマンディーの森の中で開催された。これはフランスの国立森林庁が森林保護の大切さを国民、とくに子供たちに知ってもらうために企画した第一回目の映画祭。初日の6月20日の夕刻にパリ北西部ルーアン市に近い、車で1時間半ほど行った場所にあるポール・ルーヴィエという4,500haの広大な森の中で開会式が行われた。人口4,200人の小さなコミュニティであるが、森林庁長官、セヌ・ノール地方森林局長、コミュニティの長、そして映画祭を構想・主宰したソルボンヌ大学名誉教授のジャン・モッテ氏など50人ほどが参加した。ドブルーユ森林庁長官はあいさつの中で、「となりのトトロ」は1994年に初めて見たが、その時の観客は彼一人しかいなかったと感慨深げに当時を語り、森がペローやプーシキンなどの物語に大きな影響を及ぼしたことに触れながら環境や経済面だけでなく、心へあたえる森の効用についても語った。筆者からは、日本の国土の69%が森林であること、森が災害防止や空気の清浄、陸の動物、海の魚たちにとっても大切なことを述べたうえで、フランスの女優ジュリエット・ヴィノシュが出演している河瀬直美の新作映画「ラ・ヴィジョン」は、奈良吉野の森を舞台にしていること、「シャポニスム2018」の一環としてポンピドゥーセンターで上映されること、などに言及した。この映画祭はポール・ルーヴィエのほか、レッツ、フォンテーヌブローというフランス北部の3大森林で7月22日まで開催される。



「森の中の映画祭」開会式に集まった人たち



宮崎駿監督と女優ジュリエット・ヴィノシュの対談映像

森の中の開会式終了後、町中のレ・ザルカード映画館に場所を移し、初日にはジュリエット・ヴィノシュが5月末に日本に訪れた際に行った宮崎駿監督との対談を収録した30分ほどの短編映像が「となりのトトロ」上映前に特別限定上映された。その対談の中で、宮崎氏は「トトロ」などがどのような背景で生まれたのか、子どもの頃の木の記憶を述べ、一番のお気に入りの木は自宅にある榎の木であるが、その木の葉が、原発が爆発したとき、風ですべて裏返った、木が何か異様なことを感じたのだろう、そのことが忘れられない、としみじみと語った。一方のヴィノシュは、5〜6歳の頃、ワクチン注射を打って気分が悪くなったとき、木にもたれたら、はじめて自分の存在の喜びを知った。その経験が今の自分をつくったこと、河瀬直美の映画で奈良吉野の森を歩いて深く感動し、以前にもそこにいたような不思議な感覚を覚えたことなどを述べた。

こうした会館外の活動にも当館は積極的に後援・協力している。